

新潟大学歯学部創立50周年に想う

新潟大学／東京医科歯科大学名誉教授 細田 裕 康

本年4月、新潟大学歯学部は創立50周年を迎えたことを先ずもって心からお祝い申し上げたい。

嘗て、創立25周年記念誌に「歯学部回顧－創設期の断章」と題して投稿したことがある。当時既に東京医科歯科大学に転任しており、東京から新潟大学の発展を見てきた一人でもある。

この50周年を迎えるにあたり、私は幸い88歳の齢を経て生存しているが、創設当初以来の盟友、小林茂夫元学部長始め10名の教授は故人となられた。改めて去られたその月日を思い、ご冥福を祈る次第である。さて、往事茫々であるが、初代教授として若干39歳の私は、実学の教育には厳正であった。手抜き、不確実、不誠実は許さない信念であった。当時の学生の中には弱音や悪口を陰で吐いていたことは承知している。私は米国のロマリング大学の臨床・基礎実習で暫時インストラクターをしたこともあり、教授室によく出入りしていた。某学生の作品が机上にあり、出来映えを褒めたところ、教授の口からquitと一言。退学させたとの事である。理由を聞いたところ、嘘をつく、誠実でないと言うことだった。学生は一般に高い授業料を支払っているから、休講はあり得ないと言うし、また教授が授業に遅参すると学生がブーイングを呈し、学部長が事情説明に来るといった状態で、彼等は兎に角、真面目で積極的に日本では見られない光景であった。デンタルボックスなども与えられた図面を診て、DIYで作っているのを見たこともある。

学生にとって大学は自分の一生の仕事を決める為の自己鍛錬の場であるはずである。歯学部に入り歯科医療に従事する目的を持てば、そこは修行の場と云っても過言ではない。米国から帰って一年後に新潟に赴任した時は、東京医科歯科大学歯学部にも劣らぬ学部を作り、優秀な学生を輩出しようと原耕二助教授（故人・歯周病学教授）と情

熱を燃やしたものだ。従って、誠実さと努力の乏しい学生諸君には怖い存在であったであろう。当時は、教室員も少ない上、歯学概論、歯内療法学、小児歯科学、医学部学生への歯科学等の講義を担当しており、兎に角、日曜日も返上するくらい多忙であった。40歳前後の若さ故のエネルギーがそれを可能にしたのであろう。

私は15年間新潟大学に在籍して、昭和57年5月に母校・東京医科歯科大学に転任を命じられ急ぎ単身赴任したが、新潟大学歯学部・学2の講義（月曜日）は4月から始まり途中であり、転任先では第二水曜日から学2の授業開始とやらで、7月1週目迄の6回の掛け持ち講義は新幹線の無い時代、飛行機で日曜日に羽田－新潟空港、火曜日には新潟－羽田空港と往復する羽目となり、安サラリーであっただけに家族に心配をかけた。

去り難きかな新潟！なる言葉を残して、東京在任は平成5年3月末日まで凡そ11年間に及び再び新潟に戻ることにした。有り難いことに、新潟大学では歯学部教授会の暖かい御推挙により、4月1日付けをもって新潟大学名誉教授の称号が4月8日学長室で、島田久八郎教授とともに授与された。私は平成4年8月以来、平成11年3月まで、文部省高等教育局の歯学視学委員に委嘱されていたので、各歯科大学の实地視察をする機会があり、提出書類を丹念に読み、基礎医学・臨床学講座の研究や臨床教育の現状を視認する事が出来たが、新潟大学歯学部を視察する機会は与えられなかった。そのうちに次第に年を重ねてくると、年々退官されて名誉教授になられた方々が増えてきたので、石岡 靖名誉教授と図り、名誉教授懇話会を立ち上げ、会員相互の親睦・連携を主目的に、併せて歯学教育の現状を再認識する意味で学部長・病院長から新潟大学の実情を伺う機会を作ろうと云うわけで、石岡先生を会長に、私が幹事

役を引き受け平成19年10月19日に第一回の懇話会を開催した。賛同者で当日出席されたのは、石岡靖、島田久八郎、細田裕康、塩川延洋、鈴木障俊、堀井欣一、大橋 靖、原 耕二、花田晃治、野田忠名誉教授、河野正司副学長11名であった（小澤英浩、中島民雄、岩久正明名誉教授は欠席）。その後、年一回の会合を持ったが、年を経るにつれ、故障者続出し、昨平成27年11月18日の会合を最後に解散した。この間、国立大学は独立法人となり財政が苦しくなる中、前田健康歯学部長から毎回新しい情報が提供され、时时刻刻と新潟大学歯学部は変容し、我々が苦心・立案した歯学部病院は新潟大学医歯学総合病院として、新外来棟の4、5階に移行・包含され、研究棟も色々趣向を凝らし、大改修され、また臨床基礎技能研修室の実習設備が高度・近代化し充実してゆく姿を見学させて頂いた。かくも変貌するものか。ここに改めて

前田健康学部長の手腕を高く評価し、併せて歯学部職員の協力・努力に敬意を表する次第である。

創設時、歯学部用地獲得に、はたまた新建築にと苦難の道を歩いた古老の教授達には外郭だけは昔のままの姿ながら、この内部の変容、実習機器の整備充実を喜びながらも複雑な何らかの思いがある。まさに今浦島の心境にならざるを得ない。

さて、これからは中身が問題である。新潟大学歯学部の今後の生存・継続に関わってくるからである。最近何処でも同様であるが、教室員の新陳代謝不全で若い優秀な研究者が育たない状況にある。学内の風通しを良くして良質な教授・指導者を集め、大いに業績を挙げる、一方、教育を合理化し、「医は診と治に尽きず道に終わる」心を持った包括的医療人を養成すべきであろう。今後の新潟大学歯学部の弥栄を祈念しつつ筆を措く次第である。



写真説明：最後の名誉教授懇話会
前列左より 鈴木、石岡、細田
後列左より 野田、小澤、花田、前田学部長